

「住宅地における廃棄物処理場を拠点とした環境まちづくりの提案」

地球環境問題は 21 世紀における重要な課題の一つである。かつて環境問題は科学技術の発展の代償として生じたものと扱われてきたが、現代においては逆に科学技術によってハイテクな分野で環境問題へのアプローチがなされている。しかし、今日の環境問題は負担をかける動きと解決しようという動きが極端であって、科学技術が進歩して環境問題対策の方法が多様化していくほど、一人ひとりの環境問題への責任逃れがおきているように感じる。環境問題は身近な環境に顕著に表れるレベルのものを含んでいて、私たちの生活にダイレクトにかかわってくる問題になってきているにもかかわらず、人々の環境問題に対する意識はまだ低いのが現状である。環境問題の根本的解決には一人ひとりの環境への意識の向上が必要不可欠であることを考えると、人々が生きる都市の中で環境への意識が自然に育めるようなものでなければならない。よって私は今回、環境に対してある程度ローテクな部分でもアプローチしていけるような環境重視型の都市の形について考えていきたい。

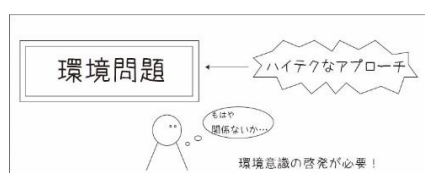


図1 環境意識啓発の重要性

ところで、住宅地においてよく問題として取り上げられるものに迷惑施設と呼ばれる施設の設置に関する問題がある。ごみ処理場などの廃棄物処理場はその代表的な施設である。このような問題はごみ処理などの恩恵を受ける地域の範囲に対してごみ処理場の悪臭などの被害を受ける範囲が狭いことで、建設予定地の近隣住民が不公平を感じて反対の声を上げることによって起こる。この問題について、その場所が適地であるという説明をすること、悪臭などの被害を被る分、温水プールなどの施設の併設によって地域住民に還元したり金銭の付与を行うことによって解決を図ってきたのであるが、それでも必ずといってよいほど地域に紛争をもたらしてしまう。きちんとしたプロセスを踏んだとしてもなかなか住民の問題を得られないのはなぜなのか考えてみると、自分たちの出すごみを処理してもらっているということをそもそも考えていない住民が多いことが原因のように感じる。彼らはごみ処理場をただの悪臭を放つボックスととらえていて、それをなるべく自分の家の近くに置かないでほしいという考えを持っている。技術の発展によって悪臭対策などが十分にとられるようになり、周辺住民に対する配慮が十分になされていたとしても、そのような努力をそもそも理解しようとせず、はなからごみ処理を自分の生活から遠ざけておきたい住民が多数である。このような現状からも、先に述べたように、誰もが関係している身近な問題に関して、それを解決しようと様々な努力をする人々がいる一方で、他の人々は責任を

放棄してなるべく関わらないようにしているような構造がうかがえる。迷惑施設の合意形成に関して言えば、行政側がトップダウン型でなく住民参加型の合意形成を行おうと思っ
ていても、住民側が受益と受苦両方の当事者として意識と覚悟を持っていなければうまく
いかないということなのである。

このような問題に向き合って住民参加型の合意形成に成功し、稼働後も周辺住民から受
け入れられながら稼働している例として武蔵野市のごみ処理場である武蔵野クリーンセン
ターがあげられる。武蔵野市ではもともと市民の市政への参加意欲が高くこのような住民
参加型の合意形成を進める土壌が存在していたため、ごみ処理場建設に対して受苦だけ
でなく受益を考えるような思考プロセスを市民が持つことができた。また、単純にごみ処理場
建設問題のみを考えるのではなく、まちづくりと併せて考えて必ずしもマイナスの課題と
とらえずに協議を進め、市と協議会が信頼関係を築けたことも成功の要因だと考えられる。
結果として現在、武蔵野クリーンセンターは地域にとって環境意識啓発、地域交流、災害時
のエネルギー拠点などの役割を持った魅力的な施設として地域に受け入れられ、新しく越
してきた住民には「このような施設が近くにあって安心だ」といわれるまでになっている。

私はこの武蔵野クリーンセンターの成功例を見て、持続可能な社会を目指すことが最優
先事項となっている現代社会において、住宅地におけるごみ処理場のような廃棄物処理施
設は、環境への意識啓発のための施設として働き、低炭素化社会のモデルをつくること
ができそうだと感じた。住宅地における廃棄物処理場だからこそ、環境重視型のまちづくりに
貢献し、その象徴となることができるのではないかと思ったのである。また、このような形
で成功した事例が増えれば、先ほどのいわゆる NIMBY 問題の根底にある住民の考え方、具
体的にはいわゆる迷惑施設のマイナス面のみをみて遠くに追いやっておこうという無責任な
考え方も改善されていくのではないかと考える。住民が施設側に協力せず、施設側も情報開
示などの協力体制をとらずにどんどんブラックボックス化が進み、両者の風通しが悪くな
るこの悪循環を止めることができるのではないかと思うのである。

ではどんな施設であれば環境重視型まちづくりの拠点となれるのかを考えていく。本稿では比較的身近で環境問題に直接関わっていくという意味でゴミ処理場に絞って考えて提案していく。まず第一に、情報開示をして住民との信頼関係を築くという意味でも、ゴミと環境についての学習施設でありたいという意味でも、できるだけゴミ処理の流れを見学できるようなオープンな施設である必要がある。ゴミ処理場で実際にピットにためられた大量のゴミを見ることは、ゴミ処理場でしかできない経験であるし、学習のための施設という意味づけがなされることで地域住民からの印象も変わってくると考えられる。また、単純に見学できるゴミ処理場であるだけでなく、地域コミュニティの形成のため、様々な地域活動を行う拠点ともなればよいと考える。例えば市をあげて環境問題やゴミ問題に関わる地域活動を行っていたとしても、実際に住民たちが知る機会がない場合や興味を示さない場合も多い。そこで、施設がもし魅力的な施設であって人が集まるような場所であれば、ゴミ処理場に併設された市民ラウンジのような場所で活動を紹介したり、実際に活動の場とすることができる。逆にそういった活動によって施設自体の魅力が上がるという循環が期待できる。その循環を起こすきっかけとなる施設の魅力としては、ゴミ処理場自体が建築的に魅力的な外観であることや、住民たちにとって直接的な魅力となる還元施設の併設が必要である。どのような外観が住民にとって魅力的なのかは地域によって異なる部分であり、先に述べた武蔵野クリーンセンターのように建築的な提案などに関しても住民参加が行われることによって地域の色があらわれるべきだと考えている。併設する施設は、エネルギー還元の点から考えてプールや銭湯などがあると考えられるが、どのような施設が求められているのかも住民によって決められるべきだと考えられる。実際に自分の住む地域に建つ建物に自分の意見やアイデアが反映されることで住民たちも施設に対して愛着を感じることができるという効果もあると考えられる。

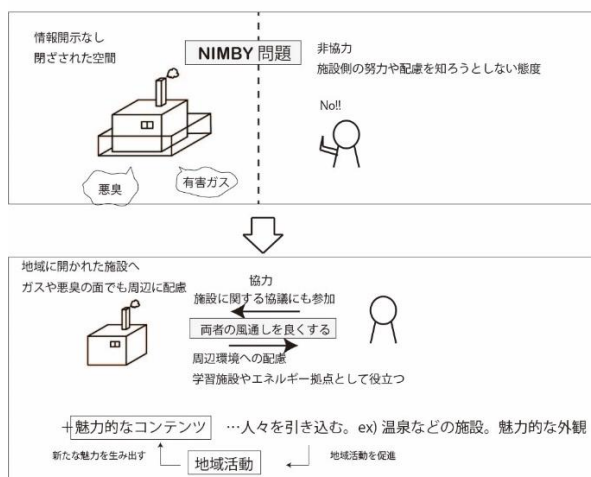


図2 住宅地における廃棄物処理場のありかた

具体的に、地域の色を反映させた魅力的なごみ処理施設を、小平市の小平・村山・大和衛生組合ごみ処理場の建て替えを想定して考えてみる。まず現状のごみ処理場は見学不可、電子掲示板による煤塵の排出量などの情報開示があるものの基本的には閉ざされた清掃工場である。このごみ処理施設をオープンな見学可能な施設にするとともに、地域の活動の場を提供し、地域交流と環境に対する意識啓発のための施設につくりかえる。

地域交流としてどんなものを想定するのかについて考えるために、小平市という場所がどのような場所で、どんなまちを目指しているのかを示す。本来は住民のリアルな声を反映させたいのだが、今回は私が調べた範囲のことから考えてみる。小平市は緑が多くまた農家も多い場所であり、花と農をコンセプトとしたまちづくりを推進している。小平市は自然環境に恵まれた住宅地であるが、高齢化がすすみ、そのため地域コミュニティの形成や高齢者のための社会活動の場を提供していくことを課題として挙げている。また、高齢化により都市農家の後継者不足も問題になっているため、都市農家の保護も目標の一つとしている。これらのことを背景に、小平市では様々な地域活動がすでに行われている。まず都市農家存続に関して、都市農家の中には農地の一部を貸して農体験をしてもらう体験農園を実施しているところがある。また、地域農産物をPRして農家を保護し、農業を観光資源としていこうともしている。さらに、花のまちを目指す活動として市民が自宅の庭を一般に開放するオープンガーデンという活動や、花いっぱいプロジェクトという小平産の花苗を用いた花植え活動を行っている。

次に、小平市の環境問題に対するスタンスに関してであるが、やはり住民の環境問題に対する意識の向上は課題の一つとなっている。現在、小平市では、ごみゼロフリーマーケットというフリーマーケットを行ってゴミの削減につとめたり、家庭から出た生ごみからたい肥を作り、農家や家庭にたい肥を配布する食物資源循環モデル事業を行っている。

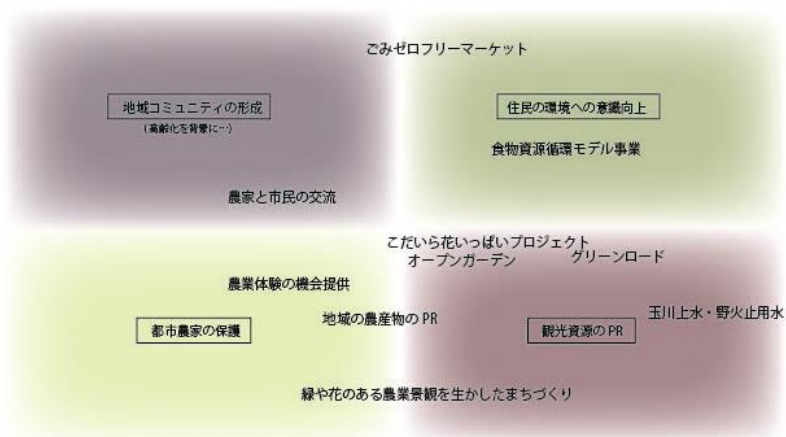


図3 小平市の課題と関連する活動

したがって、小平市において新たなごみ処理場を提案するのであれば、「花と農のまち、こだいら」をコンセプトとし、上記の活動のための場所を設けるとよいと考える。また、このごみ処理場は玉川上水と野火止用水緑道にはさまれた場所であるので、そのような観光資源を生かした魅力がうまれるような建築的な工夫があるとよいかもしれない。このようにしてごみ処理場に小平らしい色付けをしていくことで地域のシンボルとなっていけばよいと感じる。

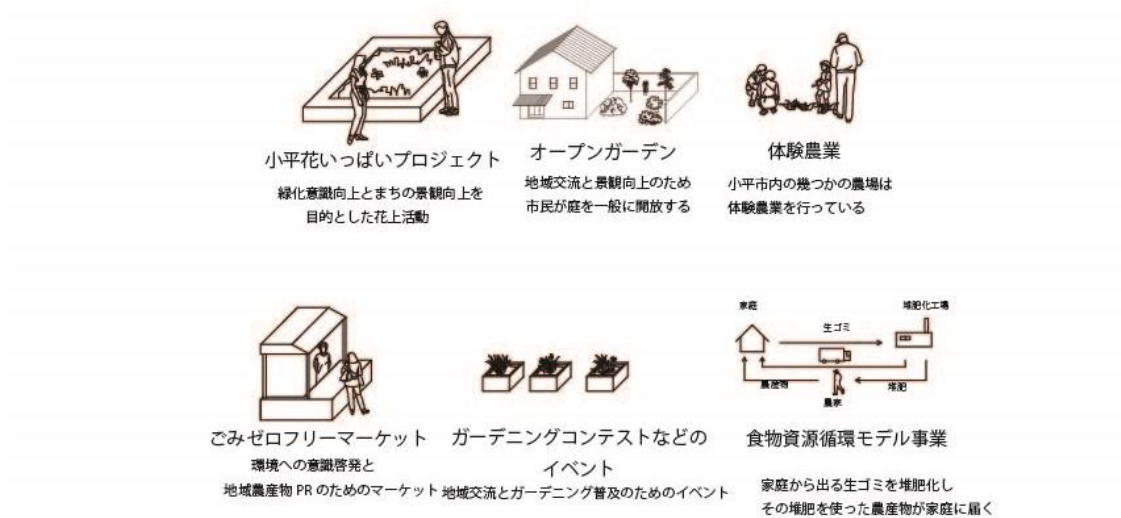


図4 地域の「色」となっていく小平市の活動の説明

私が提案したいごみ処理場とまちの関係に当てはめて考えていくとすると、人を引き込むための魅力として足湯施設などのエネルギー還元施設をおく。また玉川上水や緑道などの周辺の自然環境と一体となるテラスなども魅力になると考えられる。ここにさらに地元農産物を売るマーケットのようなものがあったとしても集客効果があると考えられる。また、たい肥生成施設も併設し、生ごみ回収、たい肥生成、農産物の販売の過程を見せて食物資源の循環の様子を可視化することで、ごみ削減への意識が高まったり、地域の活動を知ってもらうきっかけになるだろうと考えられる。入口付近には生成したたい肥を用いて花のまちの象徴として花を植えていてもよい。ごみ処理施設自体については、なるべくごみ処理の過程を分節して見学者にごみ処理の過程を理解してもらえるようなものであり、また災害時にはエネルギー拠点となるような仕組みがあるとよいと感じる。このように、ごみ処理場を単なる迷惑施設と考えるのではなく、周辺まちづくりに役立つ施設にしていこうとするアプローチができそうである。

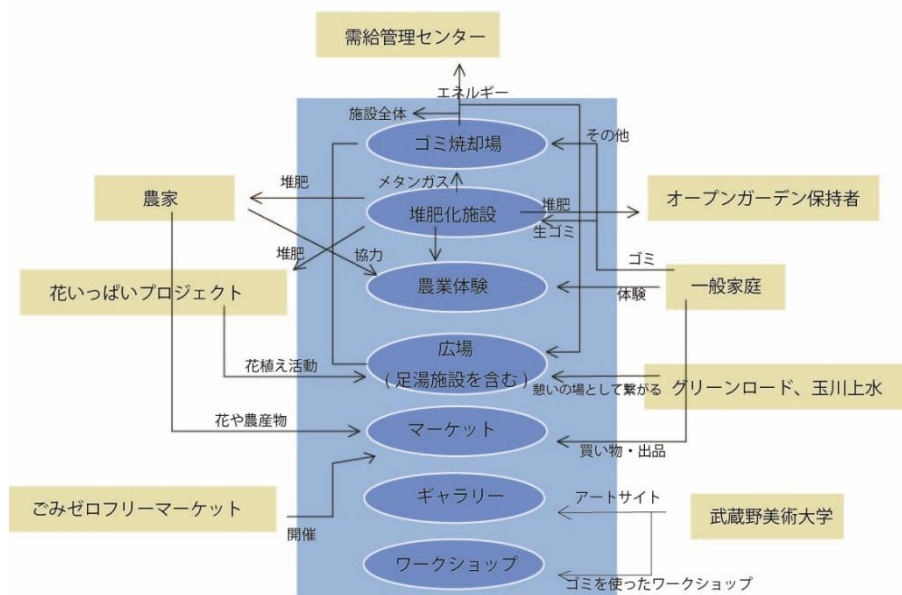


図5 小平市での廃棄物処理場を想定したときのプログラムと周辺との関係性

以上、住宅地における廃棄物処理施設のありかたについて、環境に対する意識啓発施設として役立つのではないかと述べてきた。私が思う住みたいまちというのは、安全安心で持続可能な社会をつかっていくための仕組みがある場所である。廃棄物処理場の設置に関する問題は今日の環境問題の構造をよく表しているように感じ、ここに持続可能な社会の構築のための糸口があるように感じた。環境の世紀にある今、このような施設についてまちづくりと絡めながら住民たちが参加しながら協議することがまず重要であると思う。そしてそのような施設が実際に環境意識の啓発施設として働き、まちのシンボルとして愛されていくようなまちが、めざすべきものなのではないかと思う。また、最初に述べたような環境問題に対するハイテクなアプローチとしてスマートグリッドのような仕組みが提案されてきている。一般に廃棄物処理場では莫大なエネルギーが生じる場所であるから、そのような仕組みとも相性がいい。ハイテクな面ではエネルギー拠点となりながら、地域の色が反映された住民に愛される施設であり、環境問題についての教育施設の役割も担っていく、そのような施設が現代のごみ処理場の目指す形なのではないか。そしてそのような形で成功していくまちが増えていき、このような廃棄物処理場と住宅地の新たなモデルが浸透していくことで、持続可能な社会の構築へと近づいていけるのではないかと考えている。